
青春ボリュームは最大で。

露草緋織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春ボリウムは最大で。

【Nコード】

N9672V

【作者名】

露草緋織

【あらすじ】

恋ってなんだっけ？

ロクな彼氏と出会ってこなかったせいで、恋愛を忘れてしまった哀れなJK。

「だって、めんどじゃない」

これが口癖。恋をしない代わりに、人をよく観察する癖もついてしまった。そして平凡であることに何の疑問も持たない。むしろ自分の個性だと抱えているのだ。

そんな彼女は「恋心」を取り戻すことができるのか――。

これは青春を駆け抜けるJKと、その仲間の物語。

褪めてる恋心

—— めんどくさいんだよねえ。

カップルのいちやいちゃ現場に遭遇するたびに思うこと。

…… まあ、よーするに自分を慰めてるわけだけでも。
だって、面倒じゃない。

彼氏の誕生日のたびにプレゼント用意して、バレンタインにはチョコ用意して。

彼氏の言動に一喜一憂して、さ。

哀れな生き物になっちゃうだけじゃん。

自分は、ああはなりたくない。

今彼氏との毎日が楽しいっていう不思議な錯覚に囚われている人が
いたら言ってやりたい。

彼氏なんて、所詮——。

女を道具としか見てない。

どうやったら効率的に、バレずに浮気できるか。
それしか考えてない単細胞なのだ、と。

褪めてる恋心（後書き）

新しい物語を書き始めてみました！
爽やか？な物語になるといいなあ…。

私、平凡でいいです

私は今現在、俗で言う？JKである。周りの女子が、告白だデートだ と騒いでいるが、その単語には一切関わりがない。関われない、とも言っだろうが。

……今までモテなかったのかって？ 失敬な。ウブ、と言ってほしい。

普通にJKとして生きているが、恋愛的にはJKではないらしい。あーんなことや、こーんなこと（よくは知らない。言ってみたかった）色々な面で経験豊富で年の割に妖姿媚態な友人が、「あんたさー、いつまでもカマトトぶってないで、そろそろ男と付き合ったら？ そんなんじゃ、気づいたときには女じゃなくなってるわよー」

ほっとけ、んなこと。

ってかカマトトぶってねえし。これが素だから。

口汚くそう返すと、携帯に本体よりも重そうなキーホルダーをわんさか付けて、学校指定のスクールバッグの付属のポケットに入りきらなくて窮する彼女は、「なあに？ もしかして怖いのか？ そりゃあ『はじめて』は痛いけどあー」やけに流暢に私には理解できない日本語で『はじめて』を語りだした。

何、その『はじめて』って。

本当に分からないから真剣に訊いた。

彼氏にメールを打っていたのか、ピンクの携帯をカチカチいわせていた彼女は口元を歪めて、それから。

全身で『笑』を表した。

ギャハハハと下品な声を出し、……咳き込み始め、なかなかその発作は止まらず。ム力ついた私が友人の頭を叩いたことで友人の発作は鎮静した。ながいよ。

……だいだいねえ、そういう風に私を笑ってるあんただって半年前には彼氏と破局寸前で、「どうしよ……」て泣きついてきたじゃないの。

唇を尖がらせて、反駁してやっても半年前のおどさも綺麗さっぱり忘れてしまったかのように、友人はケロリとしている。過去を振り返ることをせずに過ごせるヤツは得で気楽だ。

ちよつと僻んで仏頂面で黙り込むと、頭にポン、と右手が乗った。

どうやら謝罪のつもりของポン、らしい。……左手は携帯のキー叩いてるけど。シアワセそうににまにましながら。謝るときはさあ、ついでみたいなことやめようぜ。なぐんて言ってもねえ、ききやしないよこいつは。

「……ようクンからデートの予約が！ あゝ生きててよかったー！」「これごときで舞い上がるヤツなんだから。

どーせ予約でしょ、今すぐじゃないし。それにドタキャンされる可能性だってあるじゃん。——流石にそれを言うのはやめた。予約とはいえ、彼氏からのメール1本で有頂天になれるシアワセなヤツに。

『ドタキャンの可能性だつて——…』

そうマイナスの方に考えが転がってしまうのは、私の悪い癖だ。自覚もある。…のに治らない。卑屈になってしまふ自分に対して更に卑屈になってしまうのは、性格と——……恐らく経験だ。

今まで交際してきた男は口クな奴がいなかった。性格には私の男運と、男を見る目がなかった、とも置き換えることができるだろう。

年下に同級生に、大学生。世間的に私の年齢とオツケーな方々と

交際してきた（何でどう知り合ったかは、今となってはどうでもいい。というか、思い出せない）。だが、経験を積むにつれて、磨きに磨き上げられた私の卑屈さに彼氏たちは離れていった。1週間後に久しぶりに出会ったら、別の女を楽しそうに腕を絡め合っていた。『彼氏』であるはずの彼は、私と目があっても焦るような言動には全くならず、「あゝ久しぶりゝ元気だった？」とこちらを気遣ってくださる余裕まである。勿論のこと、女は警戒して「誰コイツ」「彼氏」は臆することなく「友達」なんてよくあったことだ。

おいおい、そりゃねーだろ。と突っ込める度胸はなく、そこで警戒心露わの女に会釈をしてその場を立ち去る。私の典型的な振られパターンである。振られているというか、気づいたら乗り換えられているわけだが。

交際解除の報告は受けていないので、それは「浮気」といいませんか。彼氏の大きな背中を見ながら、小さくそう毒を吐く。しかし恋愛経験豊富な友人によれば、それは「浮気」ではなく「自然消滅」というらしい。

そうか、じゃあ彼女と仲良く腕を絡めあつて、解けなくなつてドブにでも溺れて「永遠消滅」してしまえ、バーカ！

ありのままに素直に本人に向かって吐けたら、どれだけ楽になるんだろう。だが度胸がない私には、それはこれから先も分らないだろう。

よく女は愛嬌、なんて言うけれど、「度胸」もなければストレスが溜まっていくに違いない。

そんなカンジでモヤモヤと思考を巡らせていると、パタン、と音がした。

友人が携帯を閉めた音だ。

私はその音で、自分で自分を憐れにさせていることに気づき、やけにウキウキしている友人に「帰るの？」と声を掛けた。

私たちは帰宅部だ。今は放課後だから別に居残っている必要はない。居残っている理由は、家に帰っても寂しいからだ。寂しい、と

いうのは誰もいないという意味ではない。親は居るが、もう離婚寸前なのだ。その理由をここで述べると、我が家の醜態を晒すだけなので割愛する。分かっているのは、両親は私が邪魔ということだけだ。それでも何とか『家庭』を保っているのは、何故なのだろう。

これは小学校高学年からの大きな疑問である。

友人の居残り理由は、単純に彼氏待ちである。友人の彼氏（先程のメールの「ようくん」である。部活の休憩中にでもこっそりメールを送ってきたんだろう。悪いヤツだ全く）はサッカー部だ。最近試合が近いらしく、最終下校を過ぎても練習に励んでいるらしい（友人から聞いた）。友人は、終わるのを待っているのだ。一緒に帰宅しようと、その一心で。

なんて素直で潔白で、なんて無垢なのだろう。——彼女を見ていると、羨ましさからか、時々苦しくなる。

私だったら。

どんどん自分が惨めになる。掃っても拭っても、真っ黒なこの垢はこびり付いて取れないんだ。

対照的だ。身長が同じでも。この前の中間の数学の点数が1点も違わなくても。

友人と私はまるで——、

陽が傾き、オレンジに染め上げた空に部活終了のチャイムが鳴り響く。

ピピ——ッ　　というやけに甲高いホイッスルもチャイムと同時に鳴り響き、私たちの耳にも勿論響いてきた。それと前後するように、グラウンドの運動部（陸上部か野球部か、それとも愛しのサッカー部か）の部員の挨拶「ありがとうございましたッ」が聞こえてきた。チャイム、ホイッスル、挨拶。なんだかやまびこみたい。

そう感じて小さく微笑む。やまびこ、昔よくやったなあ。懐かしい。……ママとパパと。当時はまだ壊れてなんかなかったのになあ。

「あ！　サッカー部終わったみたい！」

3階の教室の窓からグラウンドを見下ろして、友人は嬉々として叫ぶ。

見ていて微笑ましいというか、何というか。

……いいねえ、楽しそうで。

「いつまでもカマトトぶってるからよ。私もう帰るね！」

？ 一瞬理解出来なかったが、どうやら口に出してしまっただけらしい。

嬉しそうに、本当に幸せそうに軽い足取りで教室を出て行く友人。その後ろ姿は、いつもの口達者な友人ではなく、すっかり誰かの『彼女』になっていた。

窓の外から、大きな歓声が聴こえる。いやよくよく聴くと、誰かが誰かを囃し立てているような。

ピューピュー、と口笛。こんなことする時って、

色恋沙汰だけだよねえ。

窓からのぞくと、『彼女』が『彼氏』に抱き着いた後らしい、と分かった。

幸せだねえ、とババくさく一言。でも時と場所は選ばなきゃ。こちらは純粹に友人としてのアドバイスである。

まあでも、一度浸かったら周りなんてどうでもよくなるよね。という同情は私の貴重な数少ない経験からのピックアップである。

またワアッ、と大きな歓声が上がる。それが虚しく耳朵を打ち、

彼氏、つくってみようかな。

ふとそう思った。

運動部が、帰宅するためにそろそろと校門に向かっている。私も帰ろ。

私は、最後まで教室にいた者の責任として、開けっ放しの窓を閉めて。

椅子に体温ぬくもりを残して、教室を後にした。

私、平凡でいいです（後書き）

お久しぶりです。

ファンタジー系小説「海とモミジ」は、設定構想中のため更新暫く停滞します。つなぎとしての小説です。

CMのリズムは意外と心地よい

「え……、ようくん合コン行くのお？」

「だから、ダチが幹事やっててさ。人数合わせで来いってウルセーんだよ。疾しいことしないからマジで」

「ホント？」

「当たり前だろ、しょう子が居るんだから。あ、なんならお前も来る？ 合コンだけカレカノ同伴OKらしいからさあ。……どんだけ人数たりねーんだよ」

「アリガト、ようくん。大好き！！」

「俺もだよ」

……何だあ？ このベタ甘会話は。いちやいちや全開だな。

バカップルぶりを披露しているのは、携帯ストラップを付けすぎの友人とその彼氏さんだ。

せつかく机に突っ伏して、気持ちよく寝ていたのに。砂糖みたいな甘々の声で目が覚めてしまった。安眠妨害をしないでほしい。

無理やり起こされた皮肉として、前の席でいちやいちやされているお二方の椅子を軽く蹴ってやった。

しかし小さく蹴ったし、何よりカップルトークで盛り上がっているので無視された。くそう。

もういい寝てやる、と意気込んだ私の肩を誰かが叩いた。

見るとストラップ女（友人なのに酷いあしらい）こと、しょう子である。

反応鈍いな。今頃気づいたのか、と椅子を蹴ったことで文句を言われるのかと私は身構えた。

しかし彼女は顔中溢れんばかりの笑みだった。どうやら蹴ったことへの文句ではないらしい。……っていうか、カレシに合コンに誘われただけでこの笑みか。こいつは昔から韜晦することがないわけで

はないが、どうやら彼氏にだけは違うらしい。……というのは高校生活以来からの付き合いで発覚した事実だ。

大きくクリツとした瞳を更に大きくさせながら、

「ねえ、アヒナも合コン行かない？ 女友達も居ないと寂しいからさあ」

アヒナ——というのは私の名前だ。字面は、亜雛。雛という字の画数が多すぎて、あまつさえややこしいので、テストの解答用紙に名前を書くのに毎回苦労して毎回カタカナで書いているのは余談である。滅多に見ない名前のせいとカタカナ効果で、初めて私の答案の採点をする高校教師は、私をハーフかクォーターか、と勘違いするらしい。おかげで、英語の授業のときは寝ていたり話を聞いていなくても注意は受けない。ってかさあ、もしハーフクォーターだったとしても、英語が堪能な人種とは限らないでしょ。と突っ込みたいが、問題はそこではない。言っておくが、私の両親（不仲だが）は、両方とも日本人である。したがって私も生粋の日本人である。ああああ、もう名前に対しての思い出がありすぎて余談どころか脱線してしまった。

話の核心を思い出し——鍋に箸を突っ込み餅を摘み上げると、ネギやエノキなどあらゆるものがくつついてくるように——ついでに過去の出来事を思い出して私は渋い顔になった。

しかししょう子は、私が緊張しての表情だと取っただけ。まあそれも強ち間違っているわけではないのだが（合コンへの思い——緊張の占める割合は8%ほど）。

「だーいじょうぶよあ。緊張しなくても皆盛り上げてくれるからあ。あんたも彼氏ほいでしょ？ それにあんた合コン初めてじゃないでしょあ？」

やけに語尾を上げて喋る口調はいちいち何故か鼻につく。眉間にしわを寄せてから、ああそうか、と合点がいく。私の『彼氏』が「

浮気」した相手もこんな喋り方だったからだ。未練はなかったはずなのに、と心の中で苦笑する。やっぱり『彼氏』が私の隣にいてほしかった、なんて。そんな再確認みたいなことを。

しかしこの場合のしよ子子は嫌味を言っているつもりではないだろう。単純に純粹に「友人」としての気遣いなのだろう。早くあんたも彼氏を作りなさいよ、あたしみたいに。毎日が明るく、かつ楽しくなるんだから、という恋愛的先輩兼友人としての気遣い。

そう、お気遣いどうも有難う。シンプルに爽やかに思ったことは流しておく。感傷的にならないように。ならないうちに。

じゃあ若干皮肉に聞こえるけども、その親切心だけは頂いておくわ。

と身に覚えのない、恐らく気を悪くするであろう前半だけ口を慎み、誘ってくれた友人へ差し支えの無い後半だけを舌と唇を動かした。

「ダメダメ。現実から逃げちゃあ。彼氏さえ居ればあんたの思考もメランコリックじゃなくなるわよ。きつと。ねえ行こう。知らない女の子に囲まれて、ようくん盗られないかヒヤヒヤしているより知ってる女の子と楽しく行きたいの」。アヒナはいい子だもんね」

なあんだ。結局は自分が可愛いんじゃないか。

私はあんたの魅力を上げる道具か？

『アヒナはいい子だもんね』

その後何をつけるかによって、この言葉が温情によって発せられた言葉か、先鋭な言葉かが判断できる。

ケース？『いい子だもんね。——人の気持ちをよおしく理解してくれてさ』

ケース？『いい子だもんね。——人の彼氏奪わない、空気が読める子でさ』

色々逡巡してから、はたと気づいた。ケース？もケース？も何を付けようが全く同じじゃないか。ただ言い回しが間接的か直接的かの違いだけで。

当たり前だよなあ。だって同じ人の思惟^{根っこ}だし。同じ土と水^{人の心}で育ったんだし。

やっぱりこいつは、一番厄介な部類だ。皮肉を言っているつもりではないが聞いている人間には皮肉に聞こえてしまう。毒を吐いているつもりではないのだが、結果的には毒吐き魔と罵られる部類の厄介だと感じていないところが厄介なのだ（誤解を招かないように何度も言うが、彼女には全く悪気はない。今風に言えば、K・Yなのである）。

別にこの台詞だけで、「しょう子」という人間を判断しているわけではない。だが、今までの経験上そういう部類に括ってしまう。だからこいつに友人が少ないというのも宜える。だとすれば、これ（こいつに友人が私くらいしかない）は、私の見立てが外れていないという証拠になるのではないだろうか。

——なんか、あの子って毒あるよねえ。

そう感じるのは仕方のないことかもしれない。私も実際しょう子と接した人間にそう聞いたことがあるし、実際そう思うこともある。しかしそれは、しょう子が捻くれているからではない。ありのまま、性格なのだ。こればかりはどうしようもない。本人でさえ性格というのを根本から変えることは不可能だ。「三つ子の魂百まで」まさにその通りなのだから。

……分かった。行くよ合コン。

色々検証させていただいたお礼とお詫びとして私は承諾した。

「ホント！？　ありがと、明後日誘いに行くから！」

そんなに嬉しいのかね、表向きは大人しく控えめで裏では人を付度しまくっている奴が来ることが。

ややあつてしょう子は、折りたたんだメモをもう既に半分熟睡の私の手に握らせた。

私はその後勿論意識がなく、熟睡してしまった。

陽が傾き、夕焼けの橙色の光が目を刺激した。そこで目を覚ますと、既に誰もいない。窓の外からお決まりの掛け声（部活動の）が聞こえてくる。

起こしてくれりゃいいのに。全くしょう子は気が利くんだが、利かないんだか。

苦笑しながら机の中の筆記具等を、もうすっかり色褪せた水色のスクールバッグに適当に押し込んだ。

その他色々帰る支度をしていると、左手が右手と比較してやけに赤くなっていることに気付いた。ついでに何かの形が掌についている。訝しみながら、爆睡する前の記憶を必死に手繰り寄せる。少し時間をかけて1つのことが思い浮かんだ。

見ると足元に小さな紙が転がっている。私はそれを拾い上げた。

随分長い間握っていたようなので、くしゃくしゃでついでに若干汗で湿っているメモを開く。

するとそこには、

誘いに来てくれるのに、わざわざ合コンの開始時刻や住所、簡易地図や店の名前、近くに何が建っているのかまで等々書いてあった。そうそう、あいつはこーいう奴なんだ。

微笑みながら教室を出て——、もう一度教室を除く。窓はちゃんと閉まっていた。私は閉めた覚えはない。

これだから、あいつは気が利くのか利かないのか、分からなくなっちゃうんだよな。

だからさあ、私はあいつのこと——……。

しょう子は恋愛さえ絡まなければ、柔順で周りのことがよく見える濃やかな少女なのだ。

私はメモを財布に入れ、今朝見た洗剤CMの歌を口ずさみ、ダンスを踊りながら校門を潜ったのであった。

見極めてから交際を

何で……、

何でなのよお……！

私ずっと待ってたのに。寒い中、暖房具カイロ1つですつと……！あんたがくれた、とか？とかその他訳の分からん私好みじゃないファンシーな柄のマフラー。明らかにサイズも違う。横幅も縦幅も足りん。こんな幼児期に捲くマフラーじゃボケエエエエエエエ！
！ みたいなのやつだけど！ あんたが私にくれた初めての物だからわざわざ捲いてきたつてのに……。

何で、ちがう女とあつたかい喫茶店の中で楽しそうに雑談してんのよ——…！

追懐している。過去に交際していた男との。恐らくこれは2年前。相手の男は大学生だった。と思う。

待ち時間を大幅にオーバーされ、その日はとっても寒い真冬だった。底冷えし、生理でもないのに腹痛を起こし、近くにあつた喫茶店のトイレを借りようかと飛び込む前。脚が、止まった。

——夢だと思った。夢であつてくれと思った。

硝子越しにはつきり見えた、今は憎きカレシあいつ。と、全く面識がない女。金髪に多分染め、ケバケバしい化粧を施した女。

何で。昨日約束したじゃない。「絶対行くから。見せたいものがあるから」って。見せたいもんってこれか？ これなのか？ 浮気現場を見せたかったのか？

頭は一時パニックを起こし——、電池切れになったかのように、頭の芯がすうっと冷めた。

どうせ私のこと好きでもなんでもなかったんでしょ。本当に好きなら彼女の好きな柄で、合うサイズのマフラー渡すでしょ普通。ど

れだけ私のこと、見てなかったの。どれだけ私のことどうでもよかったの。どれだけ私のこと愛してくれてたの。本当に愛してるなら……。

彼女ほつといて別の女に愛想よくなんかしないでしょ？

トイレに入るのをやめようかと思ったが、せめて皮肉1つでも言っ
てやらないと腹の虫がおさまらなかった。息で真っ白に曇った硝子
を手袋で拭くと水滴がついた。あらあんた優しい。泣いてくれるの。

チリン、チリン……。

扉の右上に付いていた、林檎くらいの大きさの鈴が鳴り、スタッ
フに来客を告げる。「はいご来店ありがとうございます！。何名様
でございますか？」

気の良さそうなパッチリ二重の女性店員が、朗らかな笑顔と口調
で私に尋ねる。歳は20台前半くらい？胸ポケット上に付けている
ネームプレートには「伊藤」の後に小さく「江美」と表記してある。

「2名で」

「2名様…でございますか。ではお連れ様は後ほどこちらに？」

いいえ。彼はもうここに来てるはずなんです、約束してますんで
軽やかににつこりと微笑みを浮かべながら、私は押し切るように
答えた。すると女性店員——伊藤サンも笑みを絶やさず「ではご
案内しましょうか」気が利いている。店の教育は素晴らしい。案内
なんかされなくても、あいつが何処に居るか私にはもう分かってま
すけど。奥から3番目の向かって右側。38番テーブルの、ね。

奥の方に居ると思います、と自分の推測程度のことを告げる。い
や、推測っていうか本当は知ってるけど。解んだけどね。

「分かりました」伊藤サンは無駄な言動をせず、店内の案内へ移行

した。伊藤サンは私の前に立ち、スタスタと歩く。ちょっと早い。関西人は歩くのが早いってきくけどこの人も関西人かな。さっきの応対の時も標準語ではあったけど、若干関西っぽい訛りが混じってたし。

歩きながら伊藤サンの後を着いていくと、目線が下がる。伊藤サンの茶髪の旋毛^{旋毛}が見える。私は155?と小柄な方ではあるのだが、この伊藤サンは更に小柄だ。150?あるかないか、ということころである。

余計な人物観察を脳内で繰り広げていると、伊藤サンが訊いてきた。お連れ様はどうような服装で? と。店はお昼頃でかなり混雑している。スタッフとしての気遣いだろう。親切心は非常に有り難いのだが、恐らく(目算だが)5?も身長差がある。伊藤サン、あんたが見つける前に私が見つけれわるわよ。それに伊藤サンは初対面になるけど、私は何回も彼と逢ってるんだから。とは伊藤^{えづかい}サンの前で口に出すのは憚られた。

さあ、今日は彼と会ってないから分かりません。

服装については、流石に覚えてはいない。だいたいあいつはセンスが悪かったから覚えたくもない。あいつは重ね着するのが最高のオシャレだと思っているようだ。だが、柄モノに柄モノを合わせるので最悪である。秘かにあいつの周囲に男性用ファッション雑誌を混じらせておいたことは何回もあった。しかし興味を持ってくれず廃品回収まっしぐら。あいつへの「ファッションセンス上げ」は不発に終わっている。

そんなつい最近のことを思い浮かべながら苦笑する。するとあの鬱陶しい金髪が目に入った。浮気相手の女である。自分の彼氏よりも、浮気相手を先に見つけてしまったことにまた苦笑する。

どうやら目標人物を発見したようなので、伊藤サンには礼を言って案内を断る。途中にも係わらず、伊藤サンは全く気を害したような素振りもない。「ではどうぞごゆっくり」と一礼してその場を離れる。まあこのご時世なのに丁寧で愛想がいいのねえ、と半ば本気

で感心する。どっかのオバちゃんみたい私。

「でさあ、面白かったよね。あの人の一発芸」

「そうだなあ。でも一発芸しか芸がないんだから、もうじき芸能界から消えると思うよ俺は」

ふん。何を一端のTV業界の玄人気取りを。大丈夫だ。お前ももうすぐ消える。……別の意味でな。

さあ。どんな反応をする。下手な3流芸人以下の一発芸でもするのか。なら写メ用意しないとなあ。お前の弱みと腹痛への恨みとしてビラにでもして街中にばら撒いてやる。

「……——あら、誰かと思えば。顔も頭も悪いんだし、せめて目だけは大切にしなさいよ。あたしとそんなケバケバしいファンデ塗りたくった女とを間違えるなんて」

一気に人生最大の皮肉を余裕綽々と言ってやる。度胸は無かったはずなのだが、これほどの毒を吐いたのは初である。普段はキレイなのに。今どれほど腹が立っているのかよく分かる。

ぎよつとした顔で『元』カレシが私の方を見遣る。ケバ女も同じ反応だ。

「そちらさんはドナタ？ あんた面白いわね。そんなケバい方が趣味？ 『ケバ専』だとは知らなかったわ」

笑え。こいつを、こいつらを凍てつかせ破壊するくらいに。

元カレシはさっきまでの陽気さはどこへ飛ばしてしまったのか、真っ蒼のまま固まってしまっている。女の方も始めこそは ぽかーんとしていたがだんだんケバイ表情が憤怒に変わっていく。面白い、男は真っ蒼で女は真っ赤か。女が憤然として、テーブルを思い切り

叩いて立ち上がる。瞬間辺りが騒然となるが、今はどうでもいい。

「ちょっと何よあんた！ デートの邪魔しないでくれる！？ あたしとこの人はねえ、真剣に付き合ってるの、半年前から！！ ぽつと出のあんたがごちゃごちゃ抜かしてんじゃないわよ！！」

はい残念。息合っていないわねあんたたち。……そうなの、ふうん半年前から。カップルの相手が墓穴掘ってくれるとはね。ああそうだ、もう1つ掘って2人で仲良く嵌りなさい。本当の「墓穴」となるようにね。バカはバカを呼ぶ。誰か作ったのかは存じ上げないが、ホントその通りだ。

「ち、ちがうんだ。こいつとは友達で……！ アヒナ信じてくれ、お前に渡すものに相談にのってもらってただけなんだ……！！ おいお前、勝手なこと言うな！」

これには私もケバ女も啞然である。

彼女さんの「付き合っている」宣言の後にこれじゃあ、説得力は全くない。ケバ女の肩を持つわけではないが、こいつは最悪だ。余計なお世話だが、こんな奴とは別れた方がいい。毎回修羅場の度にこんな態度よ。……今ので分かったと思うけど。

当然の如く、カノジヨからの恐ろしい反駁がカレシを襲う。

「はあ！？ ザケンじゃないわよ！！ あんた浮気してたってこと！？ 信じられないあんたサイテ——！ もう別れる、2度と連絡してこないでよね！ 接触してきたらストーカー規制法で訴えてやるから！！」

まさに虻蜂取らず、な展開だ。
それにしてもストーカーとは。これまた酷い言われよう。

ケバ女がドタドタと恐ろしい勢いで店内を出た。周りの客、スタッフは唖然として残された私たちを遠回しに眺める。それが気に障る。見るんだつたらこそそしないで堂々と見なさいよ。

最早彼氏でもない、目の前にいる男は只のヘタレの赤の他人。言いたいことは全て吐き出したので、私は踵を返す。と、ヘタレ男が私の腕を素早く掴む。

「ま、待ってくれ、勘違いなんだ。本当に。ホラ渡すものもある。そこに座ってくれ……」

何でもなかったかのように、ヘタレ男は必死で笑顔を繕うがもう後の祭り。完全に口調は震えており、「彼氏にしたくない男」で街頭アンケートを行えば上位にランクインするに違いない。震える手で真つ黒な使い古した鞆から、何かを取り出す。

小さな紫の箱だ。指輪が入っていきそう。

開けてくれ、とヘタレ男が弱々しく蚊の鳴くような声で呟く。私が立ったまま冷めた目で見下ろすと、ヘタレ男は自ら震える指で箱を開けた。

それはどこもどうみても安物の、小中学生のお小遣い半年分でも買えるような宝石には程遠い石が付属の指輪。私は「愛」さえあれば、貰った物がいくら安くても別に気にしない。しかし。金属と思えるところには瑕が目立ち――、何より。

掘られている名前が私の名前ではなかった。

私は完全に呆れ返った。先程の女に渡すつもり品の品だったのだらう。使い回しとは。私にもあのケバ女にも失礼だ。

私の名前ではないことに、こいつは知っていて渡そうとしたのか。あるいは忘れていたのか。どちらにせよ人間として、男として最低の行動をとった。それにもうこんな事でしか私を引き留めることが

出来ないらしい。私はこれで本当の本当に終わりだと悟った。

さよなら。

私は端的にそれだけを述べ、踵を返した。

『元』カレシは意気阻喪で、俯いたままだった。せめて最後は潔くすれば良かったのに。みっともない。

トイレを一応の名目として来店したが、流石にこの状況では入れなかった。騒ぎを起こして、周りの客や店に迷惑を掛けたので、私は近くにいたスタッフに軽く礼をした。顔を上げると伊藤サンと目が合った。パッチリ二重の大きな瞳。こんなキレイに澄んだ瞳は初めて見た。伊藤サンは表情も変えず何も言わず、ただ硝子のドアを押して店を出て行く私を見送ってくれた。

とまあ、こんなカンジの経験が積み重なり、私は恋愛から遠ざかっている。避けているわけではないが、私の本能は「恋愛」を避けているようである。トラウマ、と呼ぶのが一番適切か。

男は信用できない。だから男と顔を見合わせて語り合う合コンには自然と足が重たくなる。しかし、しょう子と約束を交わしてしまった。本心は勿論行きたくない。だが「約束を破る」というのは私のMYルールに違反する。何故なら私は約束を守れない人間が大嫌いだからである。これは男女問わず、だ。

明日の合コンは、慣れない場なので恐らく、いや間違いなく煩勞するだろう。だがそれは別の話である。

——あー、行きたくない。何でOKしたんだろ……？

自問自答しながら、目覚まし時計をAM6:00にセットする。私は周りからもよく驚かれるが早起きなのである。早起きして家の周りを散歩するのだ。そうすれば健康に過ごせる、とTVだがラジオだからで言っていた。……まあ早起きするのにはもう1つ別の理由もあるのだが。

私は羽根布団を首まで被り、部屋の照明を落として。私はゆっくり瞼を閉じた。階下は何かがまた騒いでいた。

物事は穩便に進行させよ

……あー、なんか鳴ってる。あ、そっか目覚まし合わせてたから……。
起きなきゃ……、ああ今日合コンの約束してたなあ……、しょう子と……。

寝ぼけた頭と目は、時間が立つと同時に覚めてきた。

そーだ合コンだったなあ今日。いやいやながらベッドから下りる。ホント嫌だよ。男嫌いだし。

階段を下りながら、足を踏み外して落ちそうになったのは余談だ。バカだよなあ高校生にもなってる。

暦は11月。冬目前でうすら寒いので2階の寝室から持ってきた、サーモン色のショールを肩から羽織る。ついでに足も裸足では寒いので羽毛のルームシューズを履く。あれちょっと埃で汚れてる。後で洗濯しなきゃなあ。

ドアを開けると居間。私の家の居間は台所と繋がっている。炬燵なんてものは両親が面倒くさがって出さないの無い。私も家に居る間は2階で過ごしているので別に困らない。ある暖房具はクツシヨン4つとカイロ（使い捨て）くらいだ。これは父が仕事場で知人の余っているのを貰ってくるらしい。有り難いけど貰ってくるんなら金だよ、金。女や酒にばかりに貢いでないで、少しでも家計費として入れてほしい。しかし両親が不仲で（多分）お互い浮気してるのでわざわざ給与を家庭に入れてくれるはずもないが。ついでに両親は2人とも帰っていないかった。どうせ2人とも浮気相手の所で夜を明かしたのだろう、しょっちゅうの事だが。

朝ごはんは昨日学校帰りにコンビニで買っておいた菓子パンを齧る。このパンにはある驚きの想い出がある。

——硝子戸を押して入ったコンビニは若干暗くなった街には明るかった。コンビニのパンは賞味期限がはやいので、出来るだけ遅いのを、と探してみたが翌日の朝までもつパンはなかった。諦めてヨーグルトやジュースのコーナーをうろついていると店員に声を掛けられた。「菓子パンなら奥の方に賞味期限の長い物がありますよ」20代後半いくかいかないかの、器量が良さそうなおねーさんだった。パンコーナーをうろろしていたので氣遣つてくれたのだろう。名札を見てぎょつとした。「伊藤」さんだったからである。そーいえば何となくパツチリ二重とか客への氣遣いとか似てるかもなあ。と觀察。しかも背丈も150?前後。私よりも低い。ま、まあ「伊藤」という姓はたくさんあるよね。と動揺を打ち消す。

そうなんですか、ありがとうございます探してみます。

素直に有り難かつたので礼を言う。その後ゴソゴソと裏の方のパンを探る。——「伊藤サン」が仰られたとおり、賞味期限が翌日の朝までなんとかもつ物があつた。おお、まさに「餅は餅屋」だなあ。と感心しながらレジへ向かい、数個の菓子パンを出す。水色のスクールバッグからクマ柄の財布を取り出す。もういい加減買い換えたいよクマ柄とかさあ。中学1年生から使ってるんだよこれ。本当に何でこんなの買ったんだろ。他にもっといいのあつただろうに。いつても当時はこれが欲しかつたんだから仕方ない。

「……がお二つ。計4点のお買い上げです。780円になります」
どつかの「伊藤サン」とよく似てテキパキと仕事がはやい。似てるよなあーと彼女が商品に視線を落としているのをいいことに更にマジマジと視線を走らせる。レジ打ちが終わり、袋詰めが終わって領^{シート}収書が手渡される——はずだったのだが、「伊藤サン」が途中で腕を引っ込めた。「伊藤サン」はコンビニの制服の胸ポケットから黒ボールペンを取り出し、領収書にペンを走らせた。え？と驚いていると今度こそしっかり領収書が手に握らされた。

「ありがとうございますー。またのご来店お待ちしておりますー」

決まり文句を聞き、硝子戸を引いてコンビニを出る。

何だったんだ、と領収書に目を落とす。

目に入って驚いたのは領収書の下——販売の所に「伊藤江美」と印刷されており、

……ん？

裏に何か書いてあったのが見えたのでくりと裏返す。

裏には「It was the first time I had seen her for the past 2 years」

と書かれていた。

——という驚きの連続があった思い出のつまった菓子パンである。

それを3個一気に咀嚼して——喉に詰まったので急いで水道水でパンを流し込む。

朝食らしきものを終えて、ショールを脱ぐ。寝間着から紺色のジヤージに着替える。その上からフード付きのモッズコートを羽織る。私の所持金では到底買えないシロモノなので、母方の祖父が買ってくれたコートである。両親と私は仲が良いとは言えないが、母方の祖父母とはそれなりに良好な関係なのだ。私の家と祖父母の家は2駅挟んでいるので、近いとは言えない。が、私は休日で時間と金があれば電車に乗って出かけていく。列車に揺られていると2駅などすぐなのだが、その間に目まぐるしく姿を変える景色は何とも言えず素晴らしい。太陽さんがご機嫌のときは、澄み渡る清廉な青の海が陽の光を反射して絶景なのだ。

祖父母の家は海沿いだ。祖父は若い頃、かなり名の知れた漁師だ

ったそうだ。「海は女房並みに大事だ。いやばーさんよりも大事なもな」と冗談めかして私の前で言ったのを覚えている。しかしその時運悪く祖母が洗濯物を干しに庭へ出てきたために、聞こえてしまった。それで祖母がかなり硬いハンガーで祖父の頭皮が見え始めた後頭部を思い切りぶん殴ったこともよく覚えている。当時はそんなコミカルなやりとりには大笑いしたものだ。今思い返せば、それも愛情表現だったのかなあ、とも思う。恐らく5歳くらいのことであつたか。年齢に関しては曖昧である。

そんな祖父は今歳が歳で漁師を引退している。合コンが終わって落ち着いていたら行こうかなあ。じーちゃんとばーちゃんの家に。懐かしい回想を紡ぎながら内側から鍵がかかったドアを開け、（こちらでも祖父が買ってくれた）スニーカーを靴下の上から履く。分厚い構造になっているので暖かい。温かいよ、じーちゃん。

準備が整うと、ドアノブを回して外に出る。その時、ハツと思い出してもう1度家の中に入る。スニーカーを脱ぐのは面倒くさかつたので、這って居間のテーブルまで向かう。匍匐前進みたい。周りはジャングルです、私は敵を薙ぎ倒す陸軍二等兵です、みたいな。はっ、すいません分隊長。軽機関銃の弾が切れました。……違うけど。

テーブルの上に何があるのかというと、1つ食べ残した菓子パンである。喉に詰まって焦ったので食べるのを忘れていた物だ。それに行きつくと、モッズコート大きなポケットに突っ込む。あ、突っ込むといつても、勿論潰れないように優しく入れましたから、ね。再度準備が整うと、もう1度外へ出る。今度こそは不足なし。

今から何を行うのかといえば、毎朝恒例の散歩である。小学生の頃から朝早く外へ出て運動するのは好きだった。上手く表現出来ないが朝の新鮮な空気がうまいのである。だからラジオ体操が大好きで毎日欠かさず（土日も）集合場所へ行ったという、周りから見ればかなり変わった小学生だった。

一步、二歩。

つま先で地面を後方へけり出すような感じで、踵から着地する。ウォーキングとして良い歩き方。だが、それは始めの間だけで時間が立てば周りの景色に見とれて普通の歩き方になってしまっている。だって毎日毎日歩いてるけど毎日毎日周りの模様は違ってるんだもん。見惚れて視線が奪われちゃうんだから。

コートのポケットから先程突っ込んでおいた菓子パンを千切り、口に運ぶ。行儀はあまりよろしくないが、歩きながら食べるパンはまた格別なのだ。

朝の薄い霧に浮かぶ黄色いハルノノゲシ。上を見上げればビワや小さな子供の掌のような真っ赤な紅葉。

この辺りは結構田舎なので、道端には草花が目立つ。昔から草花図鑑はよく読み込んでいたので、この辺りの植物なら名前と姿は一致する。

あ、団栗みつけ。あっちにもこっちにも。

団栗を拾いながら、走ったり歩いたり。今日の散歩もいつもと何ら変わりなかった。

待ち合わせの時間が来た。昼過ぎである。

彼らの姿が居間の窓から見えた。

茶色い髪を軽く巻き、ハートの揺れるピアス。デコルテを魅せつけるように胸元が大きく開いた、真っ白なカットソー。ウエストにはベルトをIN・鮮やかな淡いピンクのティアドレスカート。足元は真っ白なパンプス。所々光が反射して長く白い脚が宝石の如く光り輝いている。これぞまさに脚線美。

……というキアイ入れまくりのしょう子が、彼氏を伴って私

の家の前に現れた。約束していた通り、合コンへのお誘いに来てくれたのである。

チャームが鳴って靴を突っ掛け、私は玄関から出る。

「こんにちわ。アヒナ、準備は、い……い……い……？」

私の姿を視線に捉えたしょう子は、あろう事かあんぐりと口を開けて啞然とした。その口の大きさといったら！ 玉ねぎが1個まるまるすんなり入りそうなほどである。

横を伺えば、しょう子の彼氏「ようクン」もしょう子と同様の素振りである。おいおいイケメンさんがそんな顔しちゃいけないよ。悲しむよ、隣りにいる彼女が。

「あんた、それ本気イ！？」

え、何よ。

私が露骨に顔を顰めた刹那。

悲鳴のような叫び声のような、とにかくヒステリックな大声がしょう子の喉から溢れまくった。彼氏は一拍遅れて彼女の口元を手に塞ぎにかかった。

は？ だから何なのよさっきから2人して。

「ア、アヒナ……！ 何なのその格好……！」

何なのって、私服だよ。これから合コン行くんでしょ？ 騒いでないで早く行こうよ。

何も異常に感じず、しょう子を急かすとまたしょう子から喉が干切れんばかりの悲鳴が上がった。

o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

.....
|
T

物事は穏便に進行させよ（後書き）

体育祭が延期になってしまいました…。
更新が遅くなったのも体育祭の練習で疲弊していたからです……。

最善策を賜りたい（前書き）

お気に入り登録してくださった方、本当に有難うございます！
励みになります。

感謝感謝です^^

最善策を賜りたい

「何なのって、私服だよ。これから合コン行くんでしょ？ 騒いでないで早く行こうよ」

「ちよつ、あんたそれ……！ 合コンに着ていくものじゃないわよ、分かってんの、ジャージよジャージ！ あんたが今着てんのはジャージなのよ！！」

この日、私の格好。『そこらの店で売ってそうな青いラインが入ったジャージに、例のモッズコートを羽織っている』だけだった。そんなものでもない、という形相でしよう子は必死で私に訴えた。

曰く「合コンにジャージなんて、ケーキを箸で食べるくらい変なのよ！！」と。

ケーキを箸で食べる人なんて、世界中探せば絶対存在するよ。例えばフォークが洗浄中で箸しかなかった場合の人とかさあ。あんたケーキを箸で食べる人のこと敵にまわしたからね、絶対。後で報復で箸でしか食べることが出来ないケーキとか出てくるかもしれないわよ。そうなっても知らないんだから。

「と、とにかく着替えないと……！ ようクン、合コン開始まで時間あるかな！？」

しよう子は慌てて鞆から携帯を探り出し、「ようクン」は袖を軽く捲くり、隠れていた腕時計を一瞥した。

「もう時間はない」と二人一致で導き出した結論に、二人は慌てふためいた。

当事者を差し置いて、二人で狼狽する様子が滑稽だった。

否応なく連れてこられたそこは、カラオケ店だった。

まあ学生だしなあ、高価な店で合コンをする　と期待していたわけではないのでそれは別によい。

予約されたとみえて、この店一の大部屋だった。誰か知らないが
お疲れ様。

しかし、五月蠅いな。ガチャ、と微妙に透けている扉をしょう
子が開ける（私は彼女の背に隠れているような体になった）。する
と、ブワツともものすごい音圧が私に思い切りぶつかってきた。どう
やらカラオケ機械からの溢れ漏れの音のようである。

「――あー、遅かったね耀平^{ようへい}！。とその彼女のしょう子さん。と
そのまた友人の……アヒナさん？」

この部屋には熱気がモワモワと籠もり、居心地の悪さを私は静かに
感じ取った。心なしか、鼻のてっぺんに汗をかいたような。家の
冷凍庫にはカップ系のバニラのアイスを放り込んでいる。持ってこ
なくてよかった。いや別に持つてくるつもりは一切なかったけど。
昔よくおっちょこちょいのかあさんが、よく間違えて冷蔵庫に入れ
ちゃってたなあ。今はもう、どーでもいいけど。

「ごめんなさい、ギリギリだけど……。あつ、もしかしてもう時間
オーバーしてますか!？」

私はしょう子のこういうところには感服せずにいられない。彼氏

——ようクン（耀平クンだったか）が居るとはいえ、ここの合コンメンバーとは初対面のはずである。一度も会ったことのない人物に屈託なく話が展開できるというのは、私には箸で豆腐を掴んで崩さず、50mを疾走するくらいの至難の業だ（こんなの誰だって出ようこない）。

いやいやたいしたことないよ。時間なんか一々気にしてたら楽しめないもんね。

と、茶髪で垂れ目の——何となくパンダを連想させる、一見優男がはにかみながら答えた。

そうですか、よかった。

しょう子は明らかに安堵した様子で、その優男に勧められた手近な席に腰かけた。ようクン——耀平君はその斜め前の席に。

そして、しょう子という分厚く丈夫な“壁”を失った私。その私は、黒髪の——何となく獵犬を思わせる男に手招きされて、その隣に座った。

ちなみに私はジャージ姿ではない。別に私はジャージでむしろ良かったのだが、しょう子がガンとして首を縦に振らなかった。（時間が無いのにも係わらず）しょう子は猛ダッシュ、私は引きずられるようにして彼女の家に逆戻りしたのであった。

彼氏のようクンは、事態についていけないようで、ポツン……と一人その場に残された。

しょう子と私の家の距離は走って約5、6分程度。遠いとも近いともいえない、微妙な距離だ。私は中学3年間陸上部に所属していたのだが、その脚力は高校生活の帰宅部のせいですっかり衰えてしまっていた。やっぱり散歩だけじゃ駄目なのかなあ。と運動不足を地味に痛感する。

そんな風に感傷に浸っていると、隣りではしょう子が言葉に出来ないほどの恐ろしい形相で自分の鞆の中を探っていた。目当ての物を指で掴むと、彼女は鍵穴に突っ込んだ。高速早送りのようなスピ

ードで、しょう子はドアノブを回して玄関を開ける。慌ただしくヒールを脱ぎ散らかす。鞆をそこらに放ると、ドタバタと一気に階段を登った。それからカップラーメンの麺がまだ少し硬いくらいの時間、二階から何やら音が響いてきた。ややあつてこれまたすごい勢いで自分の部屋からしょう子が戻ってきた。いや、戻ってきた、というような表現では妥当ではない。手には何やら白い衣服をひっつかみ、玄関の靴クローゼットから素早く選んで私の足元にバン、と叩きつけるように置く。そのさまはまるで牙を尖らせた肉食獣のようだった。目つきは焦りからか、つりあがり、ビー玉を光に透かしたかのように煌々と光っている。

はやく着替えて！ 着替え終わったらそのブーツ履いて！ 支度終わったら呼んで！ 私ようクンに連絡してるから！

齒切れよく短歌のようなリズムで、しょう子は捲くし立てた。

私はそんな肉食獣に逆らえず、いやいやながら白い衣服を広げてみた。それはミニワンピースだった。袖はシフォンのように丸く広がっている。しょう子の趣味だから勿論胸元は……、開いている。いや開きすぎている。

私は良くも悪くも行動はマイペースなので、のろのろとジャージを上下とも脱ぐ。それから少々躊躇ったが、ミニワンピースに袖を通す……なんかやけにスースーするなあ。季節は冬目前だし、これだけだと薄ら寒い。あといつもだいたいジャージだし、こういうオンナノコ？ っていうカンジの服は敬遠している。着なれていないせいだろうか。

しょう子は携帯をいじりながら背を向けている。衣擦れの音が切れて、私の着替えが終わったのを悟ったらしいしょう子は「はやくブーツ履いて！」とまた急かした。

そのブーツは、真っ黒のニーハイブーツだった。丈が長かったから、すっかり冷えてしまっていた脚はゆっくりと寒さが溶けていった。なんだ、乱雑にそして適当に選んだように見えたけど。やっぱり「あいつ」ならではの気遣い……なのかな。

「よし、着替え終わったわね！ さあさあ行くわよ、あつ、その『脱皮前の古角層』は置いていっていいからね」

……。

酷い比喻だな、私の心は鋼頑文の岩じゃないつーに。

とは言えず（何より迷惑を現在進行形でかけているのだ）、大人しく心におさめる。

しょう子がもう1度ヒールに足を突っ込み、玄関を開ける。と同時に、冷気が身体に纏わりつき、私はモツズコートを慌てて羽織った。

いつでもどこでも、あったかい。ありがと。

この合コンが行われている部屋。ざっと通観してみると、参加者は私たちを含めて八人。内訳は、私たち（私としょう子と耀平くん）を含めて、女4人&男4人。マンツーマンで会話を進めることができるようなくみになっていた。

しょう子は彼氏が合コンに行くのをあれだけ嫌がっていたくせに、見知らぬ初対面の男と盛り上がっている。で、彼氏さんは焼きもちでも焼いているのかと、視線をそちらに投げてみる。すると彼氏さんは、しょう子の恋心が飛んで行ってしまわないかどうか、心の臓が胃に開きそうなほど気になっているようだ。凝視している、というわけではないのだが、彼氏さんの心の悲痛な叫びが聞こえてくるような気がする。無意識だとしてもあまりに酷い。彼氏はもっと大事にしなきゃ。

罪作りの女。

唇をそつとその発音の形に動かしてみる。これだから、あんたは『しょう子』なのよ。

開始して1時間も経ってないというのに、カクテルやビールの缶

などが卓上に並んでいた。そのさまはまるで、ボーリングのピンのよう。いや、そんなに綺麗に整列してるといわけではないのだけれど。

一応未成年なので、アルコール系には手は出さない。私はこう見えて、世の中の法は守るのだ。だから無難にオレンジジュースを注文した。

オレンジジュースが届いた。その色は濃く、怪しく光をはね返す。毒々しいほどに。

「へー、アヒナちゃんってお酒とか飲まないんだ？ 大丈夫だよ、ベロベロになっても俺が連れて帰ってあげるからさあ。——俺のベッドの中でイイコトしょ？」

いえ、間に合ってます。ベッドくらい自分の家にもありますから。図々しくも私の隣に尻を置いた、黒髪のチャラ男が私に話しかける。

男ってやけにベッドベッドって言いたがるよなあ。ベッドに女連れ込んで、博奕とかやんのかしら。いやしりとりか？ でも夏なら熱気で暑いはず。あ、でもでも冬なら暖房いらないから、電気代削減になるのかな。エコってやつ？

悶々と考えてみる。すると、チャラ男が槍で突き刺しても崩れなさそうな程の笑顔で「あっはは、そんなに悩まなくてもいいよ。俺上手いから。痛くないよ？」

「……？ ……痛い？ ベッドの中で遊ぶのって、そんなに危ないの？」

どうして布団かぶって、トランプやしりとり等するのが痛いのか？ 私は思いつき怪訝な顔になった。これだから、チャラ男系は嫌なのだ。話している分野が、ゲリラ戦と文房具のメーカーほど違う

ので、会話が成立しない。おつかしいなあ、同じ日本に籍おいてるはずなんだけど。

「……え？ ……あつ、もしかしてアヒナちゃんって処女……なの？」

しよじよ？ 何だそれ。あ、さては『しろうじよ』と聞き間違えたか。……何て失礼な奴なんだ。ヒラヒラお洋服（借り物）着てんでしょ。どっからどうみても『少女』でしょーが。

「あ、やっぱり？ 安心してーよ。じゃ今夜がアヒナちゃんにとっての“初体験”ってコトで？」

さつきは「……」が多かつたくせに、はやから軽々しい対応に切り替わる。やけに語尾に？をつけたがるコイツは、何を意識しているのだろうか。女でもブリッ子だと遠ざけられることもあるこのご時世、何を考えているのか。……恐らく何も考えていないのだろう、こっチャラという軽いヤローは。

というか、勝手に話を進めるな。もう片方の意見も聞け。あー、もういいや。この会話を理解することを放棄したい。いや、する。

「ホントに大丈夫だって。合こコンが終わったら行こうよ。記念すべき“初体験”♪」

……放棄した。放棄したけれども。

——だから、“初体験”って何なのだ。

最善策を賜りたい（後書き）

約1カ月、まるまる更新がとんでしまいました。

これの連載が終わった後の、新しい物語の設定を考えていました。後を考えるより、今を書け！……って感じでしたけれどもね。

中間テスト、やっと前半（1日目）が終わりました。

敵は、あと国語と英語！

勉強しまくって、のーみそは盤石じゃあ！

……期待するような立派な戦果はあがりませんけどね。毎度の事。私の場合、勉強時間と結果（点数）は比例しないのです……（泣

暗い夜道は気を付けましょう

「いやっ、だからいいです……！ 結構です！」

「いいじゃん。俺とやるんだろ？ 俺、技巧あるから大丈夫。気持ち良くさせてあげるよ」

ああ、なんでこんなことになってるんだろ。

何だかやけにテンションが高い野郎。こいつとはしょう子に誘われた合コンで知り合った。名前は聞いたけど……、どーでもいい情報なので私の脳がゴミ箱に捨ててしまった。えーっと、適当に……。あ、じゃあ『ごぼう』でいいか。まさに『ごぼう』という体系だし。『やる』だとか『気持ちいい』とか。私には外国語に匹敵するほど、意味が分からない言葉の羅列。意味は分からないながら、かなり深刻？ そうなこの事態に、頭の回転がついていけない。

合コンはまだ終わっていないというのに、「俺ら用事あるんで抜けまーす！」などと。今日会ったばかりなのに、用事もクソもあるか。それなのに周りはあるうことが「いつてらっしゃーい」。ニヤニヤと口笛で囃し立てた奴もいた。

私が全身で『嫌』を表現しているのにも係わらず、このごぼうは腕をぐいぐい引つ張る。腕の頑丈さは、一見しただけで違いが分かる。これが男女の力量の差か。悔しいが抗えない。

「ねえ、何処行くの……？ やめてよ、やめないなら今すぐ通報するから！」

自分でも珍しい、上擦った声が喉から飛び出る。

ところがごぼうは全く意に介した表情にはならず、

「通報つてどーすんの？ アヒナちゃん連絡手段持つてるの？」

ハッとして鞆を探る。

入れておいた筈の、水色の携帯は。

……ごぼうの手の中にあった。

何でこいつが持つてるの。

——思い当たるのは……、あの時。

「アヒナちゃんってさー、男苦手なんでしょ？ だからさあ、警戒心強いのかなーって思ったけどそうでもなかったね。駄目だよ、ジューズ飲むとき目と手を鞆から放しちゃ」

最悪だ。

ちよつと、幹事さん。何でこんなごぼうを合コンメンバーに加えたんですか。

こんなの、こんなの、

「泥棒じゃない！ 返してよ、それ本当に大事なんだから……！」

そう。これは本当に本当に大事な物なのだ。

だって、これは。

おじいちゃんに買って貰った物だから。周りの友達は皆持つてるのに、私だけ持っていないくて。両親に頼るつもりは毛頭なかったから、アルバイトして買おうと思っていた。でも両親は家庭に金を入れてくれない。食費や学費に、私のアルバイト代は消えてしまっていた。

そんな私を不憫に思ってたか、おじいちゃんが私の誕生日に買ってくれた。車で携帯ショップに連れて行ってくれ、機種や色を選ばせてくれた。

——そんな、大切な物なのに。

「へえ、そんな表情かおするんだ。ふうん……。いいよ、返してあげても。……でも条件がある」

取りすぎる私を嘲笑うかのように、ごぼうは携帯を持つ手を高く高く上げる。身長が155？しかない私は、必死に手を伸ばしても届かない。

どこまでも卑怯で悪辣なこのごぼうを、私は怒りを込めて鋭くねめつける。

「あはっ、いいねえ。その顔。……簡単だよ、今ここでキスしてくれたらっ……。！？」

迷う時間すら惜しい。
返して、早く。

公衆の面前。

一瞬ざわめく人々。瞠目する人、慌てて目を逸らす人。普段の自分ならこんな状況耐えられない。いや今だって携帯がかかっていなければここまで必死にはなれない。

見知らぬ気に入らない男に大切な携帯に触れられるのは、大切なおじいちゃんを穢されるようで堪らなかった。

たとえこれが、——ファーストキスであっても。

「これでいいでしょ。返してもらっわよ」

自分が言い出したくせに、私のキスで怯んだごぼうの手から携帯を奪い返す。

腕を引っ張っていたときはあれだけの力があつたのに。今のこいつの手の力は、コンニャクのような力だ。このヘタレごぼう。興味で目を光らせていた人々は、時間が立つのと比例してどんどん散っていく。

「……気が済んだでしょ？ もう二度と私に関わらないで」

鋭く言い放つと、踵を返す。

辺りは暗い。日が姿を消し、闇が活動する時間となっている。すると後ろから、ものすごい力で腕を掴まれた。振り払おうとしたけど、当然振り払えなかった。

悲鳴を上げる暇もなく、人通りが全くない細い裏路地に連れ込まれる。

抵抗してみるが、全く離れられない。女とはここまで華奢で、

…非力なのか。

夜の冷気で、すっかり冷たくなったコンクリートの壁に身体を押さえつけられる。

「あつはは、ただ無口で気が弱いのかと思っていただけ。俺に向かってあんな台詞を吐けるのはアヒナちゃんだけだよ。アヒナちゃんってめっちゃ俺の好み」

そうだった、こいつの顔ってイケメンの部類に入るんだっけ。…ってしょう子が。ごぼうなのに。

って何自意識過剰な！ こういうのって自分カッコウイイとか思ってるんだらう。自分で鏡を見ると7倍可愛く（格好良く）見えるらしいし。

あああ、今それどころじゃない！

「ちよつ、何すんの、放してッ……！！ ……ふう、……ッん」

何かが口の中に侵入してきた。

舌だ、と理解したとき。ごぼう舌は私の舌に絡みついた。

自分でも驚く。今まで出したことのない甘い声が喉から漏れる。

ナニコレ、キモチワルイ。

誰か、……助けて。

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。離れない、——怖い。

「大丈夫だよ、泣かなくても。直に良くなるから」

何が。

そう考えるほど、脳にはもう余分な隙間がない。

感じたくなんかないのに、身体は勝手に甘い反応をする。どんどん身体力が抜けていく。

自然とごぼうに凭れる格好になる。

「へえ、何だかんだ言ってもアヒナちゃん俺が好かつたんでしょ？

身体は頭より素直なんだよ。いい声で啼いてくれたしね」

「……、ちがッ……」

もう擦れる声しか出ない。

啼いてなんか、ない。あんたがいいわけなんてない。何勘違いしてるの。

用意できている言葉も喉に引っかかって出てこない。

言い返してやりたいのに。あんたなんかに、絶対なびかないってことを。

その時。

「いってエー!!」

ごぼうが頭を押さえて叫ぶ。

ごぼうの腕の力が緩む。その隙に私は残っていた意識でごぼうの腕から逃れる。が、脚が縛れてその場に倒れこんだ。

何が起こったのかと、微弱な力ながらも首を動かして辺りを見回す。

漆黒の闇の中に、更に黒い影が浮かび上がる。

ゆっくりと目を凝らす。すると。

目の前に誰かが立っていた――。

人の物は投げちゃいけません

給食センターのおばちゃんが懐妊なさったとのご一報が、各担任から届いた。

私は素直に残念な気持ちになる。だって、給食はすつごく好きなのだ。弁当だったら一から用意しないといけないけれど、給食なら食器にご飯よそうくらいだもんね。手間かからないし。

っていうか、妊娠だったのか。それは申し訳ないことを言ってしまった。というのは、最近あまりに腹部が目立ち始めたおばちゃんに「おばちゃん、食べすぎじゃない？ 低カロリー^{ローカロリー}の給食食べなきゃ」と廊下ですれ違ったときに言ってしまったのだった。その私の言葉に、苦笑い（引き攣^{きりこ}った笑顔）で「そうねえ。」「おねえさん、も給食頂こうかしら。御稜^{やうりやう}如さんみたいに細くなりたいわあ」とご返答。

『おばちゃん』が気に障ったらしい。でも別に老けてるって意味の『おばちゃん』じゃない。親しみをと感謝を込めて給食の『おばちゃん』なのだ。おばさん、という意味ではない。ほら例えば、今『看護婦さん』って言わない方がいいけど（男性職員だって御精勤していらつしやるからね）、『看護婦さん』の方が何となく温かみを感じれると思う。私はナイチンゲールが頭に浮かんでくる。でも『看護師さん』ってなるとハリネズミみたいにツンツンしているというか……。脱線しちゃったけど、まあそんな感じ。

私は別に細いわけじゃないけどなあ。小食で小柄だから（なんせ身長155？）細く見えるのかもしれない。背の高いしょう子が羨ましい、本当に。脚短いと色々困る。走るのも遅いし、ハードルだつて脚が引つかかる。中学の時は陸上部だったから余計に困った。

……前者は多分脚の長さだけのせいじゃないと思うけど。

「ねー、アヒナ。ちょっとアヒナ！ 聞いてる？」

しょう子が乱暴に私の肩を揺すりまくった。

ぼんやり&油断していた私は悲鳴を上げた。高校に上がるまで柔道を本気で真面目にやっていたあんたの肩と一緒にすんな！

「いやー、ごめんごめん。…ってやめてよ！ 『乙女』ってことでようクンには通してるんだから！ 私の暗黒歴史を掘り返さないで！ あと私は柔道だけじゃない、合気道もやってたん……」

しょう子はハツと口を押えて、私を軽く睨んだ。何よ、自分が護身用なのー、とか言いながら習ってたんだろーが。痴漢撃退するのーって。しかも今のは、あんたが勝手に自壊したんじゃないか。己の失態を他人に押し付けるな。日本国憲法にも書いてある……の、だろうか？（知らない）

「あーもう、今のは忘れて。……だからあ、今日給食がないじゃん？ コンビニまで一緒に買いにいこうよあ」

はああ？ わざわざ買いにいかなきゃなんのかい。私は小食だし、昼食くらい抜いたって別にどうってことないんだけど。めんどくさいことは出来るだけ避けて人生を歩いていきたい。それにしょう子、あんたはむしろ食事抜いたほうがいいよ。いつそのこと半年くらい食わなくてもいいんじゃない。胃腸さんも楽になるしね（勿論冗談。しょう子はモデル並み…とはいかないけど、結構細い）。という旨を伝えると、しょう子から鍛え抜かれた鉄拳が飛んできた。そしてそれは見事に私の右頬を捉えた。

「はああああ——？ なんですってえ——？ 私の胃腸の勤勉

さを褒めてくれてるのぉ？ それとも……」

喋りがねちつこくなってきた、面倒にもなってきたので、しょう子の香りつき（イチゴ）の消しゴムを投げてやった。数秒後、聞こえるはずのポンという着地音は私の耳には届かなかった。そりゃそうだ。だって消しゴムは教室の開いていた窓を通り抜けて消えてしまったのだから。

—— あとはまあ、ご想像にお任せします。

「もうっ、信じらんない。勝手に消しゴム投げといて、あまつさえ行方不明にしちゃうなんて！」

時は正午。場所は再び学校内の教室。

今日は、給食は述べた通りないので「各自自由に栄養を摂れ」ということになった。明日からはもう1人新しい『給食のおばちゃん』じゃなくて、おねえさん？ が来ることになったらしい。

私の前にはおにぎりが2つ。大好きなツナマヨネーズと鮭だ。向い合せの席にはしょう子。…の前には幕の内弁当と長芋と小松菜のお漬物。…とバニラアイスクリーム二つと十二コ入りのマシュマロ菓子袋。

消しゴム紛失の罪と弁償として（無理矢理）奢らされたのだ。私のフトコロは由々しい状態……。

消しゴム1つで何でこんな目に。しかも使い古したやつ（イチゴ

ピンクが所々黒くなっていた)。たかが……。

「……たかが消しゴム、とか言ったら今すぐこの場で失神させてやる」

うお。こいつは読心術でも駆使しているのか？ 腕っぷしも良し、口脅しも最恐とは。痴漢など最早敵ではないのでは。

「意識ぶっ飛ばしは勘弁。奢ってやったじゃなか。ミサイルと並んでも全く判別不能のその口を閉じて、胃に食物を収めることに集中しなよ」

「……口の減らない女……。しかも『たかが以下略』と思っていたことは否定しないのね……？」

口元を引き攣らせながら、しょう子は弁当付属の割りばしを手にとった。その瞬間ボキン、という派手な破壊音が空気を震わせた。

割りばしはその名の通り、見事に割れた。真つ二つに。……いえいえ、二つどころじゃありません。三つです。

木のくずが私の襟元にも（甲子園ピッチャーが投げる硬球並みのスピードに絶対比肩する）飛んできた。ちよつと、あぶねーじゃねーか。首に刺さって動脈でも損傷したら、あんたコンビ二弁当程度の弁償じゃ済まないんだよ？

すると、割りばしの痛ましい一生の一部始終を捉えていた男子生徒が「うおお。あいつパネエ……！ ジャイオンとマンツでやつてもいけるんじゃない？」「うっわ……。俺あいつには絶対ケンカ仕掛けないようにしょ。だってまだ人生終わらたくねーもん」

恥辱で真っ赤になったしょう子は、黙って弁当のフタを、しかし思いつきり開けた。しかしセロハンテープが貼つてあるので阻止されたのだろ。しかもテープが衝撃で捻じれてしまったので、更に弁当側の守備力が上がった。コンビ二のテープは、親切で切れやす

いように切り込み点線が入っている。普通の者が普通に開ければ普通に開く。——何というか、取り敢えずごい奴……で単語合ってる？

しょう子の腕力？に恐れ慄いた男子たちはそそくさと教室を後にした。よく見てみればそいつらは中学生時代には「不良」のレッテルを貼られて、進学が危なかった奴らだった。我が友ながら、恐るべし……！

その後は二人で黙々と弁当等を食べた。しょう子の方は食い散らかした、という表現の方が妥当だっただろう。

「あーっ、アヒナみーっけ！ 教室^ニにいたんだ、探してたんだからあ。ねえしょう子、アヒナ借りていい？」

ゴミの片づけをしていると、廊下側の窓から数人の女子が顔を出した。顔は知らないので恐らく別のクラス（私の学年はクラスが4クラス）の女子生徒だろう。こっちは存在すら知らないのに、そっちは呼び捨てできるんだなあ。

「あー、もう全然いいわよ。むしろ借りて下さいって土下座したいくらい。アヒナ、あとは私がゴミ始末しておくから行ってきな」

土下座だと？ 私の財布の厚さがiPodになってしまったことに対しての謝罪の土下座？

しょう子が了解の意向を示すと、女子たちは私の腕を掴んで教室から引つ張り出した。「どこへ行くのさ」と尋ねる余地は与えられずに。

着いた場所は図書室だった。女子の誰かが図書委員なのだろう、

あらかじめ持っていた鍵を使って扉を閉め、外側からは誰も入ってこれないようにした。

「鍵なんか閉めてどうするの？ 読書オタクが泣くよ」

実際読書オタクがいるのかどうかは知らないが、私は鍵を閉めた女子生徒に問う。

するとそいつはブレザー制服のポケットから携帯を取り出し、何やら操作をして私の目の前に突き出した。

どうやら携帯で撮った写真のようである。

「これに写ってるの、あんただよね」

あー、何かお腹空いてきた。しょう子に買ってやったマシュマロでも二、三口貰えばよかった。

人の物は投げちゃいけません（後書き）

もう、更新のろまにも「程度」ucciゅうもんがあるよなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9672v/>

青春ボリュームは最大で。

2011年11月24日12時47分発行